設楽発掘通信

No.61
令和３年
２月号

『新設楽発見伝７』の開催決定！

今年度も予定していた発掘調査を無事に終了することができました。発掘調査は、地元皆様のご理解・ご協力がなければ進めることができません。平素より、愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査にご理解頂きまして、心より重ねて厚くお礼申し上げます。

毎年三月初旬に開催しています成果報告会ですが、昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、直前に中止となってしまいました。今年度は何とか開催できないものかと、そのありかたを模索した結果、会場に集まって講演をするという形ではなく、オンラインによる開催となりました。

報告する遺跡は、本紙二・三頁にあります、今年度調査を実施しました胡桃窪遺跡、添沢遺跡、下延坂遺跡、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡に加えて、昨年度調査の石原遺跡、万瀬遺跡の合計六遺跡です。調査成果をまとめた印刷資料と、遺跡ごとの動画を作成し、これをインターネット上で配信いたします。動画は、三月六日から三月三十一日までの間、公開します。スマホやパソコンで、いつもとは一味違う「新設楽発見伝７」をお楽しみください。また印刷資料は、四月以降もダウンロードが可能です。

本来であれば、町民の皆様に直接お話しができ、出土遺物もじっくり見て頂くことが、最善であると考えております。また、以前のような形で、成果報告会が開催できるようになることを、祈る次第です。

（川添和暁）

令和二年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会
『新設楽発見伝７』（オンライン）ご案内

配信開始　令和三年三月六日（土）午後一時三十分～
配信期間　三月末日まで

アクセスは左のアドレスから進んで下さい
https://www.youtube.com/channel/UCIhy9RDYYQnghH_MwJvkWpQ

※パソコンの環境などで、オンラインでの報告会視聴の難しい方は、印刷資料をお渡しいたします。
設楽町教育委員会（0536）62―0531、あるいは愛知県埋蔵文化財センターまでご連絡下さい。

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の弥生土器

今年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査は無事に終了しました。ここでは、特に注目を集めたA区の周堤の残る竪穴建物跡から出土した弥生土器についてご紹介します。

A区では、弥生時代中期後葉の集落跡が、設楽町内で初めて検出されたことは、前号までにお伝えしました。その中でも、周堤の残る竪穴建物跡は全国的にも珍しい事例です。この竪穴建物跡は、残存状況が良好で、器形がある程度復元可能な土器が五点まとまって出土しています（写真上段）。1は長野県の南信地域に由来のある土器です。口縁部に突起があることと、底部の布目圧痕が決め手となります。3は小型の台付き甕で、この時期に三河にもたらされる西日本由来の土器です。出土状態がよく、ほぼ完形になりました。4・5は、三河でよく見られる在地の甕です。この二点は口縁部が下、胴部が上と天地逆の状態で出土しました。このこととは、使用時に埋没したのではなく、人為的に逆さにして埋めていたと考えられます。また、次回使うために逆さまにして埋めたのでしょうか。興味深い事例です。

（田中良）

写真１　周堤の残る竪穴建物跡

写真２　周堤の残る竪穴建物跡から出土した弥生土器

下延坂遺跡の打製石斧

今年度の下延坂遺跡の発掘調査で出土した代表的遺物として、打製石斧が挙げられます。下延坂遺跡では打製石斧が六点出土しており、写真3は打製石斧が土坑一二二SKから出土した状態、写真4は竪穴状遺構一〇〇SKから出土した状態です。発見した時は、やはり嬉しくて、石斧をきれいにしました。下延坂遺跡の打製石斧は、長さ八・八～十・二センチ、幅三・八～五センチ、厚さ一・三～二センチの片手におさまる程の大きさで、刃先側が幅広で薄くなっています。石材は全て灰色がかった安山岩で、一部に滑らかで割れていない部分があることから、よく似た大きさや形の礫から割って作られたものと思われます。縄文時代の打製石斧は柄が付いた土掘り具と考えられていて、当時の人々の生活の中でも大いに使われたことと思われます。

（蔭山誠一）

写真４　A区　竪穴状遺構
100SK　打製石斧の出土状態

写真３　A区　土坑122SK
打製石斧の出土状態

胡桃窪遺跡の竪穴建物跡など

胡桃窪遺跡は、五月より十月まで調査を行いました。特徴的な遺構として、縄文時代前期後半（約五千五百年前）の竪穴建物跡、平安時代中頃（約千年前）の竪穴状遺構が、設楽ダムに関連する遺跡の調査で初めて（調査の時点で）検出されました。（この調査の後、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡のC区で平安時代の竪穴状遺構が新たに検出されました。）

縄文時代前期後半の竪穴建物跡は、明確な炉を持たず、竪穴の縁辺部に柱穴を配する構造です。埋土中には土器片が含まれており、これが建物跡の年代特定の手がかりとなりました。また、床面の中央に掘られた土坑から黒曜石の破片が数点検出され、産出地を明らかにするための分析を行っています。

平安時代中頃の竪穴状遺構は、焼土と炉跡を伴うもので、鉄片も同時に出土したことから、金属加工を行うための炉が設けられていたと推定しています。同様の時期・内容物を持つ遺構は、豊田市の栗狭間遺跡や奈良県の尾山代遺跡にも見られます。これらは木材加工などに関連のある遺構と考えられており、胡桃窪遺跡も同様の遺構である可能性があります。

（鈴木恵介）

写真５　縄文時代前期後半の竪穴建物跡

写真６　平安時代中頃の竪穴状遺構

添沢遺跡出土の中世遺物

今年度、添沢遺跡で実施された発掘調査では、縄文時代早期の土器が出土し、先史時代からの人間活動が確認できました。また、中世に属する遺物も一定数出土しています。今回は、中世の遺物から、渥美・湖西窯製品の日常用の山茶碗や、中国産の青磁碗の破片、鍛冶作業に伴う遺物の鉄滓、出土すること自体が比較的珍しい鉄鏃をご紹介します。

（河嶋優輝）

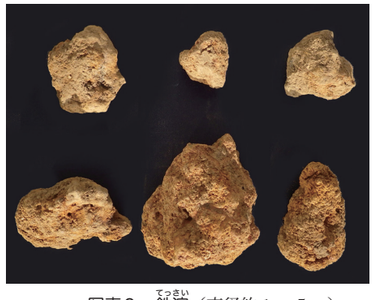
写真９　鉄滓（直径約１～５㎝）
鍛冶の際に生じるもので、十数点が出土しました。

写真10　鉄鏃（残存する長さ約１６・２㎝）左は写真、右はX線写真
中世の矢尻で、出土することが比較的珍しく、鉄滓との関連も気になります。

写真8　青磁碗の破片（約 5㎝×3. 5㎝）
中国産の磁器で、蓮弁文と呼ばれる文様が見て取れます。

写真7　山茶碗の小皿　（直径約8.2㎝、高さ約1. 7㎝）
渥美・湖西窯製品と見られる日常用の器で、他にも碗など様々な大きさのものが出土します。

設楽地域の土師器内耳鍋について

設楽ダム関連の発掘調査では、中近世の遺構などから少なからず素焼き（土師器）の鍋類が出土しています。今年度調査した上ヲロウ・下ヲロウ遺跡や下延坂遺跡でも土師器内耳鍋が出土しました（写真11、12）。ここではこの内耳鍋について考えてみます。

東海地方の土器鍋類は縄文時代以降おおむね丸底の土師器で作られました。十五世紀になると湯沸かし専用の釜が登場し、内耳鍋（小型の煮炊き具）と羽付鍋（大型の煮炊き具）と釜（湯沸かし具）の三種を使い分ける形に大きく変化しました。

この中で内耳鍋の出土量が多く、内耳鍋は上半部の形から①くの字形と②内彎形と③半球形に分けることができます（図1）。写真の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の内耳鍋は十七世紀頃の半球形内耳鍋、下延坂遺跡は十六世紀頃のくの字形内耳鍋に該当します。

丸底の内耳鍋は主に愛知県から静岡県に分布し、上半部の形の違いは時代や場所によって異なります（図2）。東三河では当初はくの字形内耳鍋が使われ、その後は徐々に内彎形内耳鍋と半球形内耳鍋が用いられるように変化しており、設楽出土の内耳鍋はその動向と概ね合っています。ただ、西地・東地遺跡（大名倉地区所在）では、整理調査で詳しく調べた結果、調査全体でくの字形内耳鍋の破片が二十九点、内彎形内耳鍋が一点、半球形内耳鍋が二十点あることがわかり、設楽地区では内彎形内耳鍋がやや少ないのかもしれません。

一方、隣の長野県では、同じ頃に東海地方とは全く異なる平底の土師器内耳鍋が普及しています。関東から甲信地方に広がる平底内耳鍋は、東海地方では出土せず、設楽地域でも今のところ発見されていません。これまで縄文・弥生時代の土器は信州の影響を受けたという研究成果を紹介してきましたが、戦国時代の土器作りに関して信州の影響はほとんど無いようです。地域交流のあり方が、いつ、どのような理由で変化したのか、謎は深まるばかりです。（鈴木正貴）

写真 11　上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の土師器内耳鍋

写真 12　下延坂遺跡の土師器内耳鍋

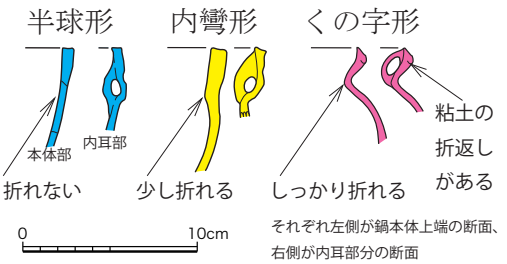

図1　内耳鍋の分類

図2　内耳鍋の地域と時代による違い

設楽発掘通信
No.61
令和3年2月号

編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話（0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　国際文化財株式会社